

## 史料調査室長就任の辞

大 野 篤 一 郎

本年四月一日より、新たに合併されることになった「史料調査室長」に就任致しました。ここでは史料室についてのみ報告と私見を述べることに致します。

今年は、「神戸女学院史料室規定」第六条に基づいて、室長の推薦で、大学の真栄平助教教授に専門委員に加わって頂きました。これは、これまでの室長が歴史や日本文学の専門家であったのに、私は専門が全く違うため、専門委員に歴史を専門とされる方がどうしても必要であると考えたためです。

去る七月三日に開かれた第一回の専門委員会では、本年度の事業計画を審議しました。そこでは、『学院史料』第一〇号の出版以外に、四年後に神戸女学院の創立一二〇周年を控えて、新たに『学院史』を出すかどうかを検討されました。これについては、一九九八年は、神戸女学院大学が発足してから、丁度五〇周年に当たるので、「神戸女学院大学五〇年史」を出してはどうかという意見もありました。結論はまだ出ておりません。

史料室は、これまで主として、かつて日本で活動したアメリカ人宣教師たちが、米国伝道会に宛てて書いた書簡（オリジナルは、ハーヴァード大学ホートン図書館の所蔵）のうち、女学院に関係の深いタルカット、ダッドレー、バロウズ、

クラークソン、ブラウン、ソールなどの諸先生の書簡を順次翻訳し、註をつけて、『神戸女学院大学論集』や『学院史料』に掲載してきました。

これらの仕事は、史料室の若山晴子さんを初め、多くの方々の並々な努力の賜物です。私は日本史の門外漢ですので、これらの宣教師の方々が書かれた書簡が女学院史の史料としての価値を持っていることは理解できますが、それ以外に日本史の史料としての価値がどの位あるのかは正確には判断できません。現在、同志社を中心に宣教師文書の研究が進められていると聞きますが、明治大正時代に日本に来ていた宣教師たちの文書が、個人別でも出版されれば、それは直接に日本における宣教活動の歴史を明らかにする貴重な文献となるだけでなく、明治史大正史の史料としても大きな価値があるのではないかと思います。従って、この宣教師文書の共同研究には、今後も史料室のスタッフが参加することは意味があると思います。

史料室は、先ず第一に、神戸女学院の歴史に興味を持たれる方々に必要な資料を提供することを心がけて来たし、今後も心がけるべきでしょう。そのためには、先ず、宣教師文書以外に、女学院史の史料として価値のあるものを、歴史研究者の意見を参考にして、蒐集しなければならぬと思います。

この課題を解決するための第一歩として、七月には、「学院関係史料の保管に関する調査」と題するアンケートを学院のすべての常置機関や委員会に出して、それぞれの部局でどのような文書が定期的に発行され、また保管されているかを知ろうとしました。これを書いている十月十七日現在、大学関係の各部署からは回答が来いますが、学院関係の部署からは余り回答がありません。定期的に発行する文書がないとか、プライバシーを犯すので公開できない文書があるなどの理由があることと推測されます。誤解を避けるために付け加えるならば、史料室はこの調査で各部署がどのような文書を定期的に発行しているか、どのような文書や記録が保管されているかを知りたいだけであっ

て、それを史料室に渡して頂きたいとか、すべて公開さるべきだとか思っているわけではありません。勿論、もし学院史料として戴けるものがあれば、できる限り引き取りたいと思いますが、現在すでに史料室が保管していて、整理しなければならぬ記録や文書がかなりあることも事実です。これらの古い記録や文書なるべく早く整理し、文書目録やシノプシスを作成して、次に学院史が書かれるときの史料を提供することが、史料室の大きな課題だと思います。

史料室の仕事について、多くの学院関係者の忌憚なきご意見を賜りたいと思っています。今後ともどうか宜しくお願い致します。